

〔研究論文〕

中等コア・カリキュラムに関わる 専門教科の教師への対応

— ヴァージニア州教育委員会の1934～1941年の刊行物群の分析を中心に —

Teachers of various subjects relating with the Core Curriculum in Secondary School
:Focusing on the Printed publications of Virginia State Board of Education between
1934 and 1941

齊 藤 仁一朗

I 問題の所在と研究目的・研究方法

1. 「一枚岩のカリキュラム」の背後に潜む専門教科を持つ教師たち

米国の1930～50年代にかけて、「コア・カリキュラム」という理念の下でのカリキュラム開発が展開された。中等教育の文脈では、米国ハイスクールの進学率が高まる中、多様な生徒のニーズを満たすためのカリキュラムの分化(Differentiation)を促しつつ、並行して多様な生徒に共通の学習の場を提供するものとして、「コア・カリキュラム」の理念が語られた(倉澤, 1985)。コア・カリキュラムは、多様な生徒を統合する公民教育カリキュラムの観点から、注目すべき対象と言える。

中等教育のコア・カリキュラムを開発・実施した代表例として、1930年代のヴァージニア州の通称「ヴァージニア・プラン」が挙げられる。1936年にヴァージニア州教育委員会(Virginia State Board of Education、以後VSBEと略称)は、生徒は万人に共通する特定のニーズを有していると指摘した。その上で、コア・カリキュラムにおいて、積極的なシティズンシップ(constructive citizenship)と現代世界における健全な個人の発達を促す共通の土台として、全生徒に必要と考えられる経験が提供されるべきだと述べた(VSBE, 1936a, p. i.)。1934年に発表された改訂版コース・オブ・スタディは、複数教科(国語、社会科、理科、数学)を包摂した総合学習課程としてのカリキュラムを構想し、その実施を試みた。木村によれば、ヴァージニア・プランは、初等・中等教育を通じて、「民主社会の存続と発展に貢献しうる青少年の育成」を教育理念として掲げ、社会問題を学習するカリキュラムを提案した(木村, 1999)。つまり、教科領域ではなく、社会問題を軸にする公民教育カリキュラムの可能性が存在していたといえる。

ヴァージニア・プランに関する先行研究は、主にコア・カリキュラムの構成原理や思想に注目してきた(例えば、倉澤, 1985; 長尾, 1984, 1985; 谷本, 1987; 佐藤, 1990; 片上, 1993; 木

※ さいとう じんいちろう 東海大学

村, 2006)。米国でも共通しており、クリバードやターナーが注目するのも、ヴァージニア・プランのカリキュラム原理に対してであった (Kliebard, 1986: Tanner & Tanner, 1990)。

しかしながら、これらの先行研究は、コア・カリキュラムを「一枚岩のカリキュラム」のように語る傾向がある。先の通り、ヴァージニア・プランのコア・カリキュラムは、国語、社会、理科、数学などの複数教科を包摂するような領域を指していた。つまり、該当する教科の教師側から見れば、自分の専門教科を教えるのではなく、コア・カリキュラムとしての共通の目標を達成するために、他の教師との協働が求められた。ただ、特定の専門教科を持つ教師たちが専門教科をコア・カリキュラムへと読み替えるプロセスは、容易ではなかったと推察される。先行研究では、このような点に対する言及がほぼみられない⁽¹⁾。唯一、倉澤 (1985) は、中等ヴァージニア・プランのコア・カリキュラムについて、「強いて教科の立場から見るとすれば、それは低学年では社会・国語・理科・数学の四分野を統合したものである。しかしこれも強いて教科的に見ればそう見られるというまでであって、それは教科の基礎に立つ問題とは全く違った生活の基礎に立つ問題を中心とする総合的・生活的な問題解決の学習である」と述べている (倉澤, 1985, pp.599.)。しかし、繰り返しになるが、専門教科を教える教師の側から見て、教科からコア・カリキュラムへの読み替えが簡単であったとは想定しにくい。

実際、コア・カリキュラムが一枚岩ではなく、専門教科の教師の協働が促されたり、葛藤が生じていたことが推察される手掛かりは各所に見られる。例えば、『ヴァージニア教育誌』に論考をあげたシンコティエグ・ハイスクールの前校長のウィーバー (Weaver, J.C.) は、「新しいカリキュラム (ヴァージニア・プラン：筆者註) が初等学校でうまく機能することには、ほぼ一般的な同意が得られた。それに対して、中等教育レベルにおいては、その実用性に対して多くの懐疑的な意見が存在している」と述べる。ウィーバー自身はその原因を、多くの教師のコア・カリキュラムに対する誤解と、専門教科への執着によるものだとして批判的に捉えていた (weaver, 1938, p.246.)。また、後述するように、VSBEの刊行物でも、専門教科を持つ教師にコア・カリキュラムへの移行を促そうとする工夫が見られる。

では、1930年代のヴァージニア州では、具体的にどのような対応がなされたのだろうか。先の通り、コア・カリキュラムの考え方は、多様化する生徒を統合するという、公民教育カリキュラムの理想を追求する試みであったといえる。ただ同時に、複数の教科を包摂する際に、専門教科の教師にどのような配慮や対応をしていったのかという点の解明は、公民教育カリキュラムを実質的に機能させるために重要な論点と言えよう。

以上を踏まえ、本稿の目的は、1930年代の中等ヴァージニア・プランを対象とし、コア・カリキュラムに関わる専門教科を持った教師への配慮や対応方法の実態を明らかにすることとする。それによって、教科横断的に社会問題を扱う公民教育カリキュラムを機能させる上での示唆を得たい。

2. 研究方法

先の研究目的を達成するために、幾つかのアプローチが有り得る。例えば、VSBEによるコース・オブ・スタディ等の主要刊行物の記述を分析する方法や、各学校での授業開発の実態を明らかにする方法や、その他の教師教育の実態を明らかにする方法もありうる。

本稿では、その中でも、VSBEによる主要刊行物を中心に分析する。具体的には、VSBEが1934～1941年に刊行した史料群に着目する。同時に、そこで論じられている内容の妥当性や学校現場の実態との関連性を確認するため、地方教育雑誌の論考なども参照する。

本稿でVSBEによる主要刊行物に注目する理由は、先行研究で通説となっている「一枚岩のコア・カリキュラム」という発想を検証する第一段階として、主要刊行物を再解釈する必要があると考えるためである。本稿では、雑誌記事から学校現場の様子に言及する場面もある。ただ、本格的に教師教育の内容を論じるのは別稿に譲りたい。

本稿では、具体的には以下の分析手順を経る。第一に1934年版のカリキュラムの特質を整理する（Ⅱ章）。第二に1935年～1936年の動向について説明し（Ⅲ章）、第三に1938年の教材案におけるカリキュラムの特質について明らかにする（Ⅳ章）。Ⅱ～Ⅳ章の分析では、VSBEが1934～1941年に出した刊行物群を分析する。それに対してⅤ章では、Ⅱ～Ⅳ章の妥当性を確認するために地方教育雑誌『ヴァージニア教育誌』の関連論文を抽出・考察する。結論部分では、本研究による結論と課題について、まとめることとしたい。

Ⅱ 『1934年版』のカリキュラム上の特質と教師によるカリキュラム編成への示唆

1. 各教科から見た作業単元への「手がかり」

中等ヴァージニア・プランは、1931年から活動が開始され、1933年～1934の実験期間を経て、1934年に『ヴァージニア中等学校のコア・カリキュラムのためのコース・オブ・スタディ（試案）：第8学年の場合』（以後、『1934年版』と略称）が刊行されるに至る（VSBE, 1934a, x i）。この『1934年版』では、ヴァージニア・プランの中等カリキュラムの開発を行う視点や、教育の目的、育成する能力、態度、中等学校8～11学年のカリキュラムに関するスコープとシーケンスが示されている。そのため『1934年版』は、ヴァージニア・プランの理念的な基盤を作った意義が大きい。これらのカリキュラムの基本構造に関しては、木村の研究で詳細な分析がなされている（木村, 1999, 2006）。

では『1934年版』では、コア・カリキュラムと教科との関係性がどのように捉えられていたか。『1934年版』では、コア・カリキュラム全体を、「社会生活の主要機能」というスコープと、「興味の中心」というシーケンスの縦横の軸で捉えていた。また、興味の中心は、11の側面を持つという形で表現された。その上で、VSBEは「コア・カリキュラムは、興味の中心の各側面の発達に寄与すると思われる。各領域の素材となるのは、社会科、国語、理科、一般数学である。これらは名前の順番で登場する。」と述べている（VSBE, 1934a, p.38）。つまり、興味の中心の各側面を考察する素材として、各教科内容が参考になるということになる。実際、『1934年版』には、このコア・カリキュラム内での教科領域ご

とのアプローチについて、多くの紙幅を割いて論じている。例えば、次の【表1】は、第8学年の作業単元の問いの例を列挙したものである。この表は、作業単元の問いと教科ごとの問いを二層構造化して提示しており、相互が関連し合っていることが分かる。また、『1934年版』では、各教科からのアプローチを示した実践例や参考文献が提示されている。これらの資料を見る限り、完全に教科が統合しているのではなく、一つの大きな問いに対して各教科の視点を分類して組み立てる形式が採られていたことがわかる。

では、なぜこのアプローチがとられたのだろうか。VSBEは、1935年に『ヴァージニアの学校におけるカリキュラム修正案の提案に関する一考察』の中で、以下のように述べた。

例えば、第8学年においては、国語、理科、社会科学、数学の教師たちは、自分自身の専門領域において、どんな時の学習においても、活用可能な興味の関心の諸側面の部分を選んで、自分の仕事の中心に位置づけるように努力するだろう。この構造は、各学年の学習に統一性を持たせるだろう。それは、各教師が自分自身の教科のみを行っている従来の方法よりも、子ども達に利益をもたらすはずだ（VSBE, 1935a, p.17）。

この記述から、(1) 専門教科の教師が、各領域において、コア・カリキュラムのスコープとシーケンスを意識した授業を行うことが求められており、(2) それによって、複数の教科からのアプローチに統一性が生まれると予想されていたことがわかる。この点は、

【表1】第8学年の各教科領域からの作業単元への手がかり (leads)

自然や発明発見の結果生まれた諸機関は、生命や財産の保護・保全に、どのような影響を及ぼしているか。それは、なぜか？			
社会科学から見た作業単元への手がかり	国語から見た作業単元への手がかり	理科から見た作業単元への手がかり	数学から見た作業単元への手がかり
<ul style="list-style-type: none"> ・生命保険や火災・事故保険は生命・財産の保護にどのように貢献するのか？ ・技術的な発明は、人間の価値を犠牲にして物質的な価値をどのように強調してきたのか？ ・政府は保護のための法律を、どのように制定するのか？それはなぜか？ ・家族は生命財産保護のために、どのように機能するのか？ ・研究による発見は生命や財産を守るのか？ ・電気の発明は保護に影響を及ぼすのか？ ・私たちはどのように生活を守りし、仕事における健康を維持することができるのか？ ・住宅事情は、家族やコミュニティの健康や福利にどのように影響をあたえているのか？ ・組織された社会は、家族や、仕事、他の関係において、良い健康をどのように育んでいるか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・慣習、個人的な動機、人々の環境は、生命財産の価値や、それらを保護する努力にどのように影響を与えているのか？ ・家族やコミュニティの機関は、生命財産保護にどのように貢献することが多いのか？ ・生活の保護や保全のために、科学者達はどのような貢献をしているのか？ ・自然界が自身の保護・保全のために提供している興味深い方法とは何ですか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・人々は自分自身や動物を伝染病から守るためにどのようなことをしているのか？ ・木材、鉄、布地などの物質を消耗からどのように防ぐか？ ・食物が腐らないようにするにはどうするか？それはなぜか？ ・火事や事故から、家やコミュニティをどのように守っているのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・測定システムは、人々の健康、癒し、福利などの状況を向上させたり、財産保護をすることに、どのように貢献したか？ ・生命保険、火災保険、事故保険は、生命財産の保護にどのように貢献しているか？ ・数学の仕組みは、政府が、市民を火事や犯罪、事故、災難から守る資金を調達することを、どのように可能にしているか？

(VSBE, 1934a, p.42. より筆者作成)

『1934年版』で関連した指摘がなされている。『1934年版』は、「指導教材は「興味の関心」という11個の側面で構成されている。」と述べた上で、先述した「作業単元への手がかり (leads)」について、次のように述べている。

作業単元へと示される手がかり (Leads) は、各教科領域の各側面に対して提供されている。これらの手がかりは、教師が作業単元を主導し、学習活動や内容への手がかりを与え、各領域のための側面の範囲の境界を定める際に、助力になるように設計している。手がかり (leads) は、表の形にまとめた。その理由は、各側面で扱う全体的な理解、情緒化された反応、能力に貢献する各教科領域の相互関係を全体図として示すためである。同時に、各側面に関わる作業を事前に協働して計画をする際の教師にとっての利便性を考慮したためである (VSBE, 1934a, pp.38-39)。

また、VSBEは、コース・オブ・スタディの学習活動例が教科別で分かれていることについても、「教師の利便性を考慮し、関係する活動をグループ化している。指導例を合わせて、教科と指導教材が、関連する活動のグループごとで、とても明確な形で示している。」(VSBE, 1934b, p.2) と述べた。このように、『1934年版』においては、教師にとっての利便性や現実的な手がかりを意識するがゆえに、「専門教科」としてのイメージが活用されていたのである。

2. コア領域の担当教員同士の関わり方への示唆

専門教科の異なる教員同士の関わり方への助言が、1934年に刊行された『ヴァージニア中等学校のコア・カリキュラムのコース・オブ・スタディ (試案) の扱い方について』で示されている。そこでは、コース・オブ・スタディの内容を踏まえつつ、学校の周りの状況や生徒の実態を加味して、校長がリーダーシップを発揮しながら、教員同士が話し合っていくべきことが論じられている。

その際に、「コア領域 (Core Field) の教師たちによる協働的な事前計画づくり」という項目がある。その中で、校長が責任を負いつつも、教員間で「1. 一年間の計画をたてる」「2. 計画を具体的な側面へと発展させる」の二つのプロセスが必要とされる。

後者の具体的な教員同士の議論を行う場合、次の三つの点が言及されている。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">a. 側面の学習経験のために、生徒たちが獲得すべき重要な一般命題、情緒化された反応、特定の諸能力を列挙する。b. 一般命題と特定の能力、それに伴う配当時間に関して、各領域からどのような貢献をすべきかについて合意する。c. <u>(カリキュラムの：筆者註) 統合を生み出すために、全ての領域で一緒に貢献し合うための方法について合意をする。つまり、包括的な作業単元においてコア領域の教師たちが協力するのか、(統合する中心点として側面を用いつつ) 各教師が各領域で独立して作業単元を開発するのかについて、合意が形成されなければならない (VSBE, 1934b, p.12)。(※下線は筆者によるもの)</u> |
|--|

この下線部のように、コア・カリキュラム (コア領域) に関わる教師たちが、完全に協力して作業単元の単元開発するか、個々が独自に開発・実践するかについて、教師同士での事前検討が必要であると考えられていた。その際に、**【表2】**のような記入フォームを

【表2】 コア領域の作業単元に関する協働的な事前計画づくりのための記述フォーム

側面 No. _____		領域 _____			単元名 _____	
復習する必要がある、前回の単元から得られる一般命題	手がかりにおいて、強調すべきと示唆された一般命題	社会科によって発展させるべき一般命題	国語によって発展させるべき一般命題	理科によって発展させるべき一般命題	数学によって発展させるべき一般命題	行われるべき活動 (各教師は、各活動を行う領域を記号で表記すべきである。つまり、社、国、理、数。)
11 × 26 のサイズを、計画シートに便利なサイズとして薦めたい。						

(VSBE, 1934b, p.19. から筆者作成)

埋める形で、特定の作業単元に関わる指導を、複数の教科の視点から多面的に行おうとしていた。これらを見る限り、コア・カリキュラム全体の統一性は重視しつつも、専門教科の立場から単元開発する選択肢も許容していたと考えられる。

以上のことから、『1934年版』においては、コア領域内における教科的な線引きが意識され、教科の視点から、コアの学習へと寄与できるアプローチが許容されていたといえる。

Ⅲ 移行期としての1935年・1936年の刊行物の特徴

1. 教科別で出される『内容に関する方針（試案）』

1935年に『社会科の内容に関する方針（試案）』『理科の内容に関する方針（試案）』『国語（英語）の内容に関する方針（試案）』と題する三つの刊行物が出された（VSBE, 1935b, 1935c, 1935d）。ここで注目されるのは、三つの刊行物が、「社会科」「理科」といった、コア・カリキュラム（領域）に含まれる教科名をタイトルに残している点である。例えば、『社会科の内容に関する方針（試案）』の序文において、以下のように述べられている。

改訂版カリキュラムプログラムに関わる教師たちが向き合っている最も難しい問題の一つは、改訂版コース・オブ・スタディで示された社会的目的に基づく学校目標を達成するために、既に精通している学校教科の内容をどのように効果的に使うかということである。社会科の内容を提案した本概要は、この問題に対処する教師を助力する手段となるように用意した（VSBE, 1935b, p.1）。

この刊行物では、本書がコース・オブ・スタディではなく、社会科の内容のコア・カリキュラムへの活用法を示すものであると述べられている（VSBE, 1935b, p.1）。実際、本書は、コア・カリキュラムの各トピックにおいて、社会科のどの内容や文献を活用できるかを示すものとなっていた。このようなスタンスは理科でも同様であった（VSBE, 1936c）。

VSBEは1939年に一連のヴァージニア・プランの変遷を『授業改善のためのヴァージニ

ア・プログラムの簡易的な説明』（以後『簡易的な説明』と略称）にまとめており、ヴァージニア・プランの1930年代の改革の経緯を知る上で貴重な文献である。この文献の中でも、1935年に出された刊行物群（VSBE, 1935b, 1935c, 1935d）を、『1934年版』の教科内容領域を関連・統合して教えるために、問題解決的アプローチへと徐々に促す試みだったと評価している（VSBE, 1939a, p.15）。このようにVSBEは、コア・カリキュラムに関わる教師に対して、従来の教科の専門性というリソースをうまく活用できるように促していた。

2. 1936年の試行版教材案におけるカリキュラムの特質上の変化と教師への示唆

1936年に『指導教材：ヴァージニア中等教育におけるコア・カリキュラム：第8学年（試案）』および『指導教材：ヴァージニア中等教育におけるコア・カリキュラム：第9学年（試案）』の二冊が刊行されている（VSBE, 1936a, 1936b）。この教材案は、主に第8学年で再構造化した教材が、効果的に使えるかどうかを判断するために、一部の教師に配られたものであった（VSBE, 1936a, Forewordより）。

本教材案では、先述した『1934年版』の「各教科領域からの作業単元への手がかり」について述べている。そこで、「前回（1934年版の：筆者）のコース・オブ・スタディの準備において、既存の伝統的教科の構造とコア・カリキュラムで示される社会問題との関係性を示す必要があったように思われる。」と述べ、教科別で出される『内容に関する方針（試案）』を準備した経緯について説明している。VSBEにとって、1935年の三種の『内容に関する方針（試案）』は、改訂版コース・オブ・スタディのような社会問題中心の学習において、社会科や国語、理科などの伝統教科がどのように機能するかを示す意図があった（VSBE, 1936a, pp. iii - iv）。その上で、VSBEは、「これらの（1935年に刊行した各教科からみた：筆者）試案的な内容の概要は、伝統的な教科構造（の指導：筆者註）から、社会問題の機能的構造（の指導：筆者）への移行が難しいと感じている教師の思考を刺激する上で、引き続き役割を果たすべきである」と述べた（VSBA, 1936a, p. iv）。また、同教材案では、興味を中心の「側面」というスコープの不明瞭さが教師を困らせてきたと指摘し、いくつかの持続する社会問題をスコープにすると指摘した（VSBA, 1936a, p. v）。

また、「専門分化（Departmentalization）」という項目で、以下のように述べている。

社会問題の学習への自然なアプローチをする際、その学習が、理科、社会科、国語の諸側面へと分かれていくことは、おそくないだろう。むしろ、それらのいくつかの内容や他の領域の内容を統合することが求められるだろう。しかしながら、主要な教科領域が専門（Department）ごとで構成され、1～2個の専門での特殊な訓練を受けた教師が働いている、というのがハイスクールの特徴である。そのため、改訂版カリキュラムプログラムにおけるハイスクールで用意した全ての教材を、この専門ごとの編成でも便利に使えるように準備をした。しかしながら、コア領域では、あらゆる相互の関連を確保できる。そして、指導に関して（改訂版カリキュラムで：筆者作成）提案された構造は、そのような関連がある状態を間違いなく提供する。（VSBE, 1936a, p. ii）

このように1936年の教材案は、ハイスクール特有の「専門分化」の現象を明示した後に、コア・カリキュラムは、その問題を乗り越えて、教科領域の関連をさせながら教えることが可能だと指摘している。ただ、1936年の教材案においても、教科の線引き自体は消えていない。例えば、第8学年で扱うべき複数の社会問題と、各社会問題の下位に位置する作業単元の事例が紹介されている。その際に、「作業単元へつながる示唆的な手がかり」として作業単元に繋がる問いを説明している。その後、「手がかりから作業単元を発展させるための示唆」として、社会科、国語、理科で関連する内容や問いを紹介している。さらに、「教師への留意点」として、以下のように述べている。

問題を適切に理解するという事は、コア領域の全領域で形成される学校経験の内容を活用することに関係する。教師の利便性を考慮し、この問題のために示した指導教材は、社会科、国語、理科というコアの諸領域に合わせて、グループ化している（VSBE, 1936a, p.3.）。

このように、1936年時点においても、社会科、国語、理科などの教科領域と作業単元や社会問題との関係を説明するのが、教師にとって分かりやすいと思われていた。1936年時点のVSBEは、専門分化の問題に言及し、各領域の関連性を強調していた。しかし、同時に、教科ごとから教材事例や問いの設定を促すアプローチは、「教師の利便性」という実際的な観点からみて必要とされていた。

IV. 『1938年版』において教科の線引きがなくなった経緯

1938年に『中等学校のコア・カリキュラム：第1学年における指導用教材』『中等学校のコア・カリキュラム：第2学年における指導用教材』が刊行される（VSBE, 1938a, 1938b）。この指導用教材集においては、『1934年版』に見られたような、教科ごとでの区分は完全に見られなくなっている。

では、どのような経緯でここに至ったのだろうか。1936年に準備された先の試行版（VSBE, 1936a, b）を再度修正し拡大する機会が、1937年に設けられた。そこで新たに作成されたプランでは、教科ごとの線引きは完全に消えていたとされる（VSBE, 1939a, pp.17-16）。1938年の夏に、前年にコア・カリキュラムの試作教材を作成・使用した教師たちが集まって作成したのが、『中等学校のコア・カリキュラム：第1学年における指導用教材』『中等学校のコア・カリキュラム：第2学年における指導用教材』（以後、『1938年版』と略称）であった。『1938年版』では、1936年から、「諸側面」を「問題」へと表現を置き換えたことが確認されている（VSBE, 1938b, p. vi.）。この結果、社会問題を軸にしたより柔軟度の高いカリキュラム構成が可能になった⁽²⁾。同書では、次のように述べられている。

1936年に開発した教材を使った教師たちは、ほぼ全会一致で、1934年版のコース・オブ・スタディよりも、1936年の教材案が優っていると述べている。1937年の改訂作業に関わった教師は、教科領域に

よって教材を分けて提示する方法を止める (make no separation) ことを決断した。総じて、教科の専門に関わらず全ての教師によって諸問題を研究することは、いくつかの領域の教師によってなされる協力的努力のために、良い事前準備となると (その場で：筆者) 信じられていた。(VSBE, 1938b, pp. xi - xii)

この引用文の最後に「教科の専門に関わらず全ての教師によって諸問題を研究することは、いくつかの領域の教師によってなされる協力的努力のために、良い事前準備となると信じられていた。」と述べられるように、各領域でバラバラに準備をするのではなく、協働的に開発を進めることが良いとされた。

『1938年版』で注目されるのは、共通学習としてのコア・カリキュラムの理念と教科横断型の学習の関連性が強調されている点である。例えば、ハイスクールに通う生徒のうちで13パーセントのみが大学進学する状況で、大学進学する生徒と大学進学しない生徒の両方のニーズをコア・カリキュラムが満たす必要があることが述べられている。そのうえで、コア・カリキュラムでは独立した教科学習よりも複数教科が関連する主題学習の方が良いとされる (VSBE, 1938b, p. x iii.)。例えば、「病気を退治する」「天然資源の最良の使い方」などの主題は、一般理科や社会科の教科書の各章を順番に学ぶ形式的な学習よりも、より刺激的で挑戦的な発達を促すだろうとしている。その上で、「そのような諸問題の学習によって、教科の複数の主要領域における教師たちが、お互いの仕事を相互に関連づけあえる。その結果、より統合された一連の経験を生徒に与えられるだろう。」と述べる (VSBE, 1938b, p. x iv.)。これらの指摘は、コア・カリキュラムにおいて、教科が連携した学習の有用性を主張するものであった。

最後に、この『1938年版』では、教師に高いレベルが求められることを確認している。『1938年版』では、以下のように述べられている。

このようにコース・オブ・スタディを使うには、一つの教科書を通してコツコツと学習を進めるよりも、はるかに高いレベルの指導が要求される。この高いレベルの指導を目指すヴァージニアの教師たちの意欲をかき立て、手助けする形で、これらの教材が提示されることを願っている。(VSBE, 1938b, p. x viii.)

教科ごとでの順番の学習を止め、教科の異なる教師が協働することの高度さを理解した上で、それを求めている。これが『1938年版』の特徴であった。このように実用的な観点や理念的な観点を踏まえ、教科の線引きを完全になくした教材が提示されていることが分かる。

これらの教科の線引きがなくなった経緯については、『1938年版』の編者の一人であったバック (Buck, J.L.B.) が『ヴァージニア教育誌』に載せた論考が参考になる。バックは、1934年のヴァージニア州のコース・オブ・スタディ (試案) が、主要教科の各セクションに区別された学習であったのに対し、1938年夏に準備された教材では、理科、社会

科学、国語、数学などの区別がない状態で、問題提示がされたと指摘している。バックは、この変化が起きたのは、『1938年版』を準備した教師たちは、教科ごとで区別された対応がなされることを避けたいと思ったからだと言った（Buck, 1938, p.142.）。

このように、VSBEの『1938年版』では、教科の区別がなくなった。このような教科の区分を廃止する方針は、1938～41年に出された他学年での教材案でも同様であった。（VSBE, 1938a, 1939b, 1941）。実際的、理念的な両方の観点にもとづき、コア・カリキュラムの教材作成における教科の線引きが消えることとなった⁽³⁾。

V 地方教育雑誌からの裏付け

本稿では、ヴァージニア・プランにおいて、『1934年版』の時点では、コア領域での教科の区分が見られたのに対し、『1938年版』になると教科の区分が完全になくなっていくプロセスを追ってきた。では、このようなコア領域の性質を、ヴァージニア州の学校関係者たちは認識していたのだろうか。ヴァージニア州の教育雑誌である『ヴァージニア教育誌』を見ると、その断片を垣間見ることはできる。以下に紹介する内容から分かるのは、コア領域に関わる教師たちが、「〇〇科の教師」として単元開発に関わっていた点である。

ループ（Loop, C.A.）の論考では、ニューポート・ニュース・ハイスクールの例が紹介されている。このハイスクールでは、興味を中心ごとにカリキュラムを作る際に、各学年の委員会主任が、月に1度、コア領域の教科担任（社会科学、国語、理科、数学）の教師とミーティングし、各授業の計画や手続きについて議論をする。それによって、教科ごとの壁を減らし、互いを関連づける方向に進められるように促している。例えば、国語と社会科学の授業を関連づける例などが紹介されている（Loop, 1936.）。その他、本稿の冒頭でも紹介したシンコティーク・ハイスクールの元校長であるウィーバーの論考では、自身の実践として、年度最初の一か月に生徒の状況などについて各教科の教師同士が対話をし、その上で、自分の教科をどう関連づけられるかを考えながら協働的な単元開発を行う事例が紹介されている。（Weaver, 1938）。またジェンキンス（Jenkins, C.C.）は、センター・クロス・ハイスクールの第一学年でのコア・カリキュラムの開発事例を報告している。この学校では、一年では社会と国語、理科、数学をコア領域に統合していた。ジェンキンスによれば、ハイスクールの第一学年において、一人の教師が社会科と国語を扱い、もう一人の教師は、理科と数学を扱ったとされる。これらの二人の教師は校長と三人で、単元を実施する前に事前計画を立てた。ここで計画された単元の中には、コア領域の四教科が同時に1つの単元に貢献する場合もあれば、教科によっては教えない単元もあったという。（Jenkins, 1937.）

その他にも、ベッドフォード・ハイスクールの教師であるトーマス（Thomas O.A.）は、「改訂版カリキュラムについて」という論考を1936年に載せている。その中で、トーマスは、改訂版カリキュラムによって、これまで他教科と切り離して自分の教科を捉えていた教師が、他教科との繋がりに気づくようになったことを指摘している。その上で、社

会科学、理科、英語の教師が協働して開発した作業单元「電力」について紹介している。この单元では、様々な電力の使用方法や創出方法を学び、関連する仕事や工場の見学・観察を行う。その上で、レポート500字を、英語教師、理科教師、シティズンシップの教師に提出すると報告されている。(Thomas, 1936, p.248)。ここで指摘されているシティズンシップの教師とは、公民科系の授業の教師であると推察される。このベッドフォード・ハイスクールの事例で注目されるのは「英語の教師」「理科の教師」「シティズンシップの教師」といった教師の専門教科の立場が明確に表記されていることである。

これらの事例から、コア・カリキュラムにおける実践は、複数の専門教科の教師が関わることを前提とし、その協働の必要性が論じられていたことを確認できる⁽⁴⁾。

VI 本研究の結論と今後の課題

本稿では、1930年代の中等ヴァージニア・プランを対象とし、コア・カリキュラムに関わる専門教科を持った教師への配慮や対応方法の実態を明らかにした。その際に、VSBEの主要刊行物群を整理することで、「一枚岩のコア・カリキュラム」とは言い切れない、専門教科を持つ教師の存在を浮かび上がらせた。

本稿の結論は主に二点にまとめることができる。

第一に、1934～1941年の報告書群の中で、コア・カリキュラムに関わる専門教科を持つ教師の存在は何度も言及されている。また、教科の線引きに言及するトーンは段階的に変化している。『1934年版』のコース・オブ・スタディでは、「社会科から見た作業单元への手がかり」という言葉にもあるように、教科の視点からコア全体を関連づけて説明する方法がとられた。そこには、教師にとっての利便性や現実的な手がかりを示す意味合いがあった。それが、1936年前後の検討によって、コア・カリキュラムの中での教科的な区分の表記が少なくなり、1938年に消える。これらの変化の背後には、カリキュラム原理上の柔軟性が高まったことも関係していた。

第二に、専門教科を持つ教師がコア・カリキュラムの開発や運営に関わっていたことは、地方教育雑誌の論考からも裏付けることができる。複数の教科の教員がお互いの授業の内容について情報共有をしたり事前計画を立てる場面や、共通のテーマに関するレポートを生徒が各教科の教師に提出する場面などが見られる。少なくとも、専門教科を持った「○科の教師」として、コア・カリキュラムに関わる場面があることが分かった。

本稿の課題として、三点挙げたい。

一点目は、異なる専門教科を持つ教師が協働した実態をより詳細に明らかにする必要がある。このためには、ヴァージニア・プランのカリキュラム立案の背後にあった教師教育的な働きかけや研修体制について、具体的な事例分析を行う必要がある。

二点目は、1938年以降のヴァージニア・プランがどのように教師に受け取られたのかについて、詳細な分析が必要である。本稿の結論として、1938年以降は報告書レベルの教科区分が消えたことを示した。しかし、それを本当に教師たちは実践可能だったのかについて

ては未解明である。第一点目の課題とも重なるが、実践上の妥協点も含めた、実践的な対応について、収集可能な史料に基づき、実態を明らかにする必要がある。

三点目は、ヴァージニア・プランの構想が練られた1931～1934年までの議論の内容を解明する必要がある。これらの議論の中に、本稿で扱えなかったコア・カリキュラムと専門教科の関連性が議論されている可能性もある。これら三点は、今後の課題としたい。

【註】

- (1) 先行研究の多くは、専門教科を持つ教師とコア・カリキュラムの関係性について言及していない。例えば、木村（1999）は、中等ヴァージニアプランのコース・オブ・スタディが「単に調べることに意義を求めるのではなく、どのような文献を調べれば、その知識に到達することができるかを、州内の教師に的確に示すことが意図されているのである」と述べている。ただ、これらの意図を専門教科の教師にどのように促していたかは論じていない。また、シーゲルやブルボウは、教員参加型のカリキュラム改革を展開した点に注目している（Seguel, 1966; Burlbaw, 2005）。しかし、これらの研究でも、コア・カリキュラムに関わる専門教科の教師の存在は明示されていない。
- (2) 木村（1999）が明らかにした通り、ヴァージニア中等学校用の『1934年版』カリキュラムと「1938年～41年版」カリキュラムとは、その構成原理が異なっていた。木村は、両者のカリキュラムが、「社会的生活の主要機能」によるスコープと「強調領域（興味を中心）」によるシーケンスで構成する点は同じであるが、各単元に対するスコープの位置付けが異なっていたと指摘している。例えば、『1934年版』では、縦横の軸が厳格に守られ、1スコープ1単元が採用されている。それに対し、「1938～1941年版」では、いくつかのスコープを複合させる形で単元が設定されている（木村, 1999, p.4）。
- (3) 「1938年版」でも、コア・カリキュラム内に複数の教科が内在することを否定していない。実際、1938年の教材案の刊行物では、「ヴァージニア中等学校コア・カリキュラムの時間配当の基準」という表がまとめられており、コアに含まれる科目の数や時間、その他の選択科目との関係などが整理されている（VSBE, 1938a, p. ix.）。この表を見ると、1日5～6時間の授業想定で、低学年ではコアに国語・社会・理科・数学が含まれ、コアの時間配分が一日4時間とされる。また、生徒のニーズが多様化する上級学年ではコアの配当時間が減り、含まれる科目も社会と国語のみとなる。
- (4) 史料収集の制約もあり、1938年以降の雑誌上の動向はまだ確認できていない。また、教師の協働方法についても、一般化できるレベルまで分析できていない。ただ、少なくとも1935～1938年頃の論考においては、教師の専門教科的な意識や区分けを念頭に置いた上で、コア・カリキュラムの単元開発事例が紹介されていたことは確認できた。

【参考文献一覧】

- ・片上宗二（1993）『日本社会科成立史研究』風間書房。

- ・木村博一（1999）「中等学校用ヴァージニア・プランの特質と全体像—『学習指導要領社会科編Ⅱ（試案）』との対比を中心として—」『カリキュラム研究』第8号，pp.1-12.
- ・木村博一（2006）「日本社会科の成立理念とカリキュラム構造」風間書房.
- ・倉澤剛（1985）『米国カリキュラム研究史』風間書房.
- ・佐藤学（1994）『米国カリキュラム改造史研究—单元学習の創造—』東京大学出版会.
- ・谷本美彦（1987）「初期社会科教育課程史研究（3）—初期社会科の概念と分析視覚—」『宮崎大学教育学部紀要』第63号，教育科学. pp.1-15.
- ・長尾彰夫（1984）「アメリカのカリキュラム理論に関する基礎的研究-4」『大阪教育大学紀要』教育科学 第V部門 33（2），pp.147-157.
- ・長尾彰夫（1985）「アメリカのカリキュラム理論に関する基礎的研究-5」『大阪教育大学紀要』教育科学 第V部門 34（2），pp.113-123.
- ・Burlbaw, L.M. (2005). More than 10,000 teachers: Hollis L. Caswell and the Virginia Curriculum Revision Program. In Burlbaw, L.M. & Sherry L. Field. (eds). *Explorations in Curriculum History*, Greenwich, Co; Information Age Publishing Inc. (pp.39-52.)
- ・Beck, J.L.B.(1938). The Place of Science in the Revised Curriculum for Virginia High Schools, *Virginia Journal of Education*, 32(3), pp.141-142.
- ・Jenkins, C.C.(1937). Using the Revised Curriculum. *Virginia Journal of Education*, 33(4). pp.186-187.
- ・Kliebard, H.M. (1986). *The Struggle for the American Curriculum, 1893-1958*, New York, NY: Routledge & Kagan Paul.
- ・Loop, C.A.(1936). Co-ordinating the New Curriculum in Newport News High School, *Virginia Journal of Education*, 24(5). pp.208-210.
- ・Oppleman, D. L. (1955). Development of the Revised Curriculum program in Virginia Secondary Schools. Master these, George Peabody College for teachers.
- ・Seguel, M.L. (1966). *The Curriculum Field: Its Formative Years*, New York, NY: Teachers College Press.
- ・Seniors of Rocky Mount high school Class taught by Miss Gladys Saunders. (1940). Seniors Look at the Curriculum, *Virginia Journal of Education*, 34(2), pp.67-68.
- ・Tanner, D. & Tanner, L. (1990). *History of The School Curriculum*, New York, NY: Macmillan Publishing Company.
- ・Thomas, O. A. (1936). On the Revised Curriculum, *Virginia Journal of Education*, 29(6). pp.247-248.
- ・Virginia State Board of Education. (1934a), *Tentative Course of Study for The Core Curriculum of Virginia Secondary Schools, Grade VIII*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
- ・Virginia State Board of Education. (1934b). *Manual of Suggestions on How to use the*

- tentative course of Study for the Core Curriculum of Virginia Secondary Schools*. Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
- Virginia State Department of Education. (1935a). *An interpretation of the Curriculum Revision Program Proposed for Virginia Schools*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1935b). *Tentative Outline of the Contents of Social Studies, Suggested for the Core Curriculum of Virginia Secondary Schools Grade VIII – XI*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1935c). *Tentative Outline of Content for Science*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1935d). *Tentative Outline of Content for Readings in English*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1936a). *Tentative Materials of Instruction suggested for The Core Curriculum of Virginia Secondary Schools, Grade VIII*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1936b). *Tentative Materials of Instruction suggested for The Core Curriculum of Virginia Secondary Schools, Grade IX*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1938a). *Materials of Instruction Suggested for the First Year of The Core Curriculum of Secondary Schools*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1938b). *Materials of Instruction Suggested for the Second Year of The Core Curriculum of Secondary Schools*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1939a). *Brief Description of Virginia Program for Improving Instruction*, Richmond: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1939b). *Materials of Instruction Suggested for the Third Year of The Core Curriculum of Secondary Schools*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Virginia State Board of Education. (1941). *Materials of Instruction Suggested for the Fourth Year of The Core Curriculum of Secondary Schools*, Richmond, VA: Division of Purchase and Printing.
 - Weaver, J. C. (1938). How to make the New Curriculum Function in the High School, *Virginia Journal of education*, 31(6), pp.246-249.

付記 本研究は、JSPS 科研費(19K14106)の助成を受けたものである。